

## アーネスト・ヘミングウェイに おける女性達(4)

—『武器よさらば』とキャサリン・バークレー—

丸 田 明 生

### I

『武器よさらば』(A Farewell to Arms)は、1929年、ヘミングウェイがその作品の主な体験となった第一次大戦のイタリア戦線への衛生看護兵としての従軍から11年の年月を経て完成したものである。その理由は、彼がヨーロッパから帰国して、作家になろうといよいよ決心をした時期、即ち20歳の頃、ミシガン州のペトスキー(Petosky)でアパート暮らしをしていた時に多分書いたと想像されるいわゆる『原武器よさらば』が、日の目をみないままにヘミングウェイの最初の妻ハドレー(Hadley)によって失われてしまったことによるものと思われる。ヘミングウェイはそのスーツケース紛失事件のショックでしばし何も手つかずの状態だったが、『武器よさらば』が10年後にはるかに『原武器よさらば』より充実した長篇としてこの世に姿を見せたことは、むしろヘミングウェイにとっても、又読者にとっても幸せであったかも知れない。ヒロイン、キャサリン・バークレー(Catherine Barkley)のモデルとされるアグネス・フォン・クロウスキー(Agnes von Kurowsky)の心情はいささか複雑であるかも知れないとしても。

もう一つ実体験から10年を経て書かれたこの作品を著者にとって都合にしたものに主人公フレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) の年齢設定が、ヘミングウェイとアグネスの場合——それは当時ヘミングウェイが19歳でアグネスが26歳——を逆転させることができたということであり、本質面においてはどうであれ、フレデリックはキャサリンをヘミングウェイ好みの女性に造りあげることができたということである。それは一口で言えば、男に対して自己を捧げていながら、同時に男に対して規範の役割をも果たす女性の謂いである。Roger Whitlow の言葉を借りれば次の如くである。

キャサリンを正しく捉えているといえる批評家の一人は、ナオミ・グラントであり、彼女はキャサリンがフレデリックよりも成熟した女性であり、フレデリックに愛の規範を教える役目をしている。キャサリンは他のヘミングウェイの女性達同様、自己犠牲に関してよき師である。「私はあなたので欲しいことをするわ。あなたの言うて欲しいことを言うわ」、そして「あなたを喜ばせるどんなことができて?」というような言葉や問いについては、多くのフェミニストや、近代人間史の中で個人主義の倫理が影響を与えた競争や孤立の荒廃的感情を見逃している「個人主義」の盲目的信奉者には少しばかり「でき過ぎの女」にみえるかも知れないが。<sup>1)</sup>

『武器よさらば』の実体験から10年後の完成のもう一つの成果は、ヘミングウェイがハドレーという心やさしい妻と数年を過ごした経験であろう。そしてそれが、美しい、しかも平和なスイスのたたずまいと快く結合し、ここにロマンチックなメロディを奏でることができたことであろう。そして最後に、これはラブ・ロマンスとは直接関係はないが、この恋愛感情の高まりや、切なさを強めるための背景の一つとしての戦場の様子を、十分史実に則って描き切ることができたからである。

## II

『武器よさらば』のヒロイン、キャサリン・バークレーは、少くとも身体的特徴においてアグネス・フォン・クロウスキーに間違いはないし、その他この作品のプロットの多くの部分は彼女とヘミングウェイとの1918年当時の実体験に基づいている。ヘミングウェイは、キャサリン——アグネス——を次のように描いている。

ミス・バークレーは非常に背が高かった。看護婦の制服と思われるものを着ていて、金髪で、黄褐色の肌と灰色の眼をしていた。ぼくは彼女は大変美しいと思った。(Miss Barkley was quite tall. She wore what seemed to me to be a nurse's uniform, was blonde and had a tawny skin and gray eyes. I thought she was very beautiful. *AFTA*, p. 18)<sup>2)</sup>

これはフレデリックが、休暇から帰って、軍医で戦友のリナルディ(Rinaldi)に連れられて病院に行き、始めて、キャサリンに会った時のものである。実際にはヘミングウェイは1918年7月8日、ベニスの北東部にあるフォッサルタ(Fossalta)で、オーストリア軍の攻撃に遭い、脚部に重傷を負ってミラノのアメリカ赤十字病院で始めてアグネスに会っている。作品中のアグネスに対する印象はこの時のものであったことは間違いない。しかしここであらかじめ述べておくが、作品中でフレデリックがキャサリンに会うのは1917年の春である。この約1年間の時間差は、ヘミングウェイが実際の戦闘の実録年月日に彼等の出会いを合わせたためであり、それは又第三部のキャポレット(Caporretto)のイタリア軍の大退却をこの『武器よさらば』のクライマックスとしたかったためと思われる。キャポレットの大退却はフレデリックの逃避行と著しいムードの符号を示すものだからであり、ヘミングウェイの「単独講和」の理由づけも又そこにあったのである。

この小説の構成についてヘミングウェイが要求した三つの点における最初の年齢の逆転についてもう少し詳しく考えてみよう。

リナルデーに連れられて行った病院でキャサリンに会った翌日、フレデリックは今度は一人でキャサリンを訪ねる。二人は庭に出て暗くなったベンチに坐る。そこでフレデリックは何のためらいもなく彼女の手をにぎり、彼女の脇の下に手を廻すのである。そして暗やみの中で彼女にキスをしようとするのだが、この時はピシヤリと平手打ちを喰う。しかし、この動作を即座にキャサリンは謝りながらも次には身をフレデリックにまかせるのである。

ぼくは彼女の眼を見いって、前にしたように彼女のまわりに腕をまわして彼女にキスをした。彼女に激しくキスをし、強く抱きしめ、彼女の唇を開こうとした。唇は固く閉じられていた。ぼくはまだ腹を立てていて、突然彼女を抱いたので彼女は身をふるわせた。ぼくが彼女を抱きしめると彼女の心臓の鼓動が感じられ、彼女の唇は開いて彼女の頭はぼくの手にもたれかかり、やがて彼女はぼくの肩に顔をあてて泣いていた。

「ねえ、あなた、私にやさしくして下さいさるわね？」と彼女は言った。

(I looked in her eyes and put my arm around her as I had before and kissed her. I kissed her hard and held her tight and tried to open her lips; they were closed tight. I was still angry and as I held her suddenly she shivered. I held her close against me and could feel her heart beating and her lips opened and her head went back against my hand and then she was crying on my shoulder.)

“Oh, darling,” she said. “You will be good to me, won’t you?”—*AFTA*, p. 27)

この手馴れた女へのアプローチといい、first kissの方法といい、これらは決して19才の“kid”のものではない。ヘミングウェイは29才のこの日までに、女に対する扱い方にかなり臆長けていたのである。それ故にフレデリックは「ぼくはキャサリン・パークレーを愛していなかったし、又

愛そうなどとは思ってもいないことはわかっていた。これはゲームなのだ。ブリッジのような。その中ではカードをきるかわりにものを言うだけなのだ」(I did not love Catherine Barkley nor had any idea of loving her. This was a game, like bridge, in which you said things instead of playing cards. —AFTA, p. 30)

と言ってプレイボーイの一端をのぞかせている。これは恋愛経験の上でもキャサリンを自己の支配下に置こうとするヘミングウェイのプロット上の要求の現れとみるべきであろう。

しかし、このゲーム的感覚も、フレデリックが負傷してミラノでアグネスと再会する時には、次第に真実味を帯びてくるのである。

彼女は部屋に入ってくるとベッドのところへやってきた。

「今日は」と彼女は言った。彼女は新鮮で若々しく、とても美しかった。私はこんな美しい人を見たことがないように思った。

「やあ」と私は言った。私は彼女を見て彼女に恋しているのがわかった。すべてが私の中でひっくりかえった。彼女はドアの方をみやって、誰もいないのを確かめると、ベッドの傍に坐り、かがみこんで私にキスした。私は彼女を下に引き寄せ、彼女にキスをすると、彼女の心臓が鼓動しているのを感じた。

(She came in the room and over to the bed.

“Hello, darling,” she said. She looked fresh and young and very beautiful. I thought I had never seen any one so beautiful.

“Hello,” I said. When I saw her I was in love with her. Everything turned over inside of me. She looked toward the door, saw there was no one, then she sat on the side of the bed and leaned over and kissed me. I pulled her down and kissed her and felt her heart beating.

—AFTA, p. 91)

そして、これに続く場面で、この病院のベッドの上で二人は結ばれるのである。

「いけないわ、あなたまだよくなっていらっしやらないんだもの」と彼女は言った。

「いや、よくなっている。ねえ、いいから」

「いいえ、まだ大丈夫じゃありません」

「いや、いいんだ。大丈夫だ。おねがいだ」

「あなた本当に私を愛してくださる？」

「本当に愛しているよ。君に夢中なんだ。お願いだったら、ねえ」

.....

「本当に私を愛してくださる？」

「いつまでもそんなこと言わないでくれよ。さあ、おねがだよ。キャサリン」

「いいわ、でもほんのちょっとよ」

「よし、ドアを閉めてくれ」と僕は言った。

「いけないわ、そんなことしちゃ」

「ああ、話は止めて。お願いだ、さあおいで」

（“You mustn't,” she said. “You're not well enough.”

“Yes, I am. Come on.”

“No. You're not strong enough.”

“Yes, I am. Yes. Please.”

“You do love me?”

“I really love you. I'm crazy about you. Come on please.”

.....

“You really love me?”

“Don't keep on saying that. Come on. Please. Please, Catherine.”

“All right but only for a minute.”

“All right,” I said. “Shut the door.”

“You can't. You shouldn't.”

“Come on. Don't talk. Please come on.”—*AFTA*, p. 92)

### III

それではキャサリンのキャラクターの大きな部分を形づくっているアグ

ネスという女性について述べてみたい。彼女は又非常に興味をそそられる人物だからでもある。

ヘミングウェイの伝記に書かれているアグネスは、アメリカに渡ってきたポーランド人を父に、将軍の娘であるアメリカ人を母に持ち、ペンシルベニア州に生まれた。父と母は父ポールが教えていたドイツ語のクラスで恋に落ち、母アグネス——母の名もアグネスといった——の両親の反対を押し切って結婚した。父が教師を止めて軍隊付きの語学教師となり、そのためアグネスは幼い頃をアラスカで過ごし、それからヴァンクーヴァーに移ったが、ジフテリアにかかり、死線をさまよったことがある。この頃彼女の一歳半年上の姉は猖紅熱にかかって亡くなっている。それからワシントンD. C. に帰ってくることになり、そこでは裕福な母の父親、即ち母方の祖父からフランス語の家庭教師をつけられ、フランス語を学ぶことになる。アグネスのドイツ語とフランス語の運用能力はかくして養成されたわけである。彼女はワシントンD. C. フェアモント女学院に2年間在学後、公立図書館司書科で教育を受け、その後ワシントンの公立図書館に4年間勤務した。その間父が腸チフスのため亡くなり、彼女は母と共にアパートに引っ越すことになった。彼女は「図書館勤務に倦きていた。これは積極的といえる生き方ではない」<sup>3)</sup> と思い、当時の社会的状況にも影響されて、ベルビュー病院付属看護婦養成所に入った。彼女の心の中には多分海外で働きたいという希望が芽生えていたに違いない。アラスカ、ヴァンクーヴァーと移り住んだ彼女の経歴が、更に外国への夢を抱かせていたし、語学を生かせることの期待もあったかも知れない。養成課程を終えたアグネスは赤十字看護部へ志願するのである。その時の身体検査とベルビュー病院の推薦書は次のようになっている。

アメリカ赤十字看護部身体検査<sup>4)</sup>

氏 名 アグネス・フォン・クロウスキー  
 検査日 1918年1月23日

年 齢 26歳  
 身 長 5フィート8インチ  
 体 重 133ポンド  
 総合判定 発育良好, 栄養状態良好  
 胸 囲 35インチ  
 ベルビュー病院  
 被推薦者 「アグネス・ハンナ・フォン・クロウスキー」  
 年 月 日 「1918年1月22日」  
 産科学履修の有無 「有」  
 幼児看護経験の有無 「有」  
 履修中の地位 「首席看護生」  
 性 格 「明朗」  
 整理整頓 「優」  
 洗 練 さ 「優」  
 積 極 性 「普通」  
 実務能力 「優」

身体検査が示す彼女の容姿, スタイル, それに推薦書が語る彼女の人物は極めて魅力的である。そして彼女がいよいよ従軍篤志看護婦として第一次大戦下のイタリアに渡る船ロレーヌ号では「軍服の兵士たちが彼女をとりまいて冗談を言って笑っている。彼女が行く所に兵士たちはぞろぞろついて行った。赤十字看護婦たちと一緒に撮った写真では彼女の顔は目立っている」<sup>5)</sup> のをスナップ写真の中でヘミングウェイ研究者レイノルズ(Reynolds)は見付けている。多分そうだろう。アグネスの幼い時からの写真のいずれも愛くるしい美しさにあふれている。いつも首を少しかしげて, まともにカメラに向かわないそのポーズはカメラ狂だったという彼女の母に負うものであろう。

しかしこのように美しく魅力的なアグネスが26歳まで独身であり, しかも結婚する機会も少ないと思われる戦線へ行こうとしていたことについては, どう解釈すべきであろうか。次のインタビューは, 1971年, 80歳



近いアグネスが、遠い過去を思い出し、センチメンタルな感情を払拭して、レイノルズと行ったものである。

— 20代のあなたは、ニューヨーク市とヨーロッパ、それにハイチを往復されていましたが、若くてとても魅力的でしたね。 —

アグネス でも、結婚はしませんでした。

— 結婚されなかったんですね。その間、一度ならず求婚されたと思うんですが。結婚されなかった — 未婚のままだったのはあなたの意志だったのですか。

アグネス 結婚したいと思う人に会わなかったのですわ。初めて外国へ行った時ある医師と婚約するところまでいっていたのですが、船が港を出たとたんにその人のことは忘れてしまいました。 — 私はこういうことには不慣れなんです。私はロマンチックに生まれついていないんです。そして私が帰ってみると、別の女が彼と親くなっていました。彼女は私のところへきて言いました。「彼をとり戻そうと考えるんじゃないよ」と。私はそんなことちっとも考えていないわと言いました。二度とその人に会いたくもありませんでした。

— 20代のあなたの特徴を言い表すとすれば、どのように自分自身を表現されるでしょう？

アグネス 私はいつも何かを求めていました。いつも冒険を求めていました。決して野心などありませんでした。ほんの少しの野心も。<sup>6)</sup>

冒険を求めていたが、野心など持たなかった、というアグネス像がここに浮び上がってくると同時に、ここに述べられている医師との関係についても、それによって自分が裕福な生活をしようとか、社会的名声を得ようとかいうことは少しも頭になかったもののように思われる。ミラノの病院における彼女の評価も又そのことを裏付けるものである。

アメリカ赤十字救急車第一分隊の操縦兵で、1918年8月1日、ミラノの赤十字病院でヘミングウェイと部屋つづきの病室に入れられたヘンリー・ヴィラード (Henry Villard) はアグネスについて次のように語っている。

私は彼女（アグネス）が背が高く、故郷から遠く離れているために一層魅力的で、快活で、敏捷で、同情心があり、いたずらっぽいまでのユーモアのセンスがあって、看護婦としては理想的なパーソナリティを備えていたのを覚えています。患者の間では「アギー」を連れ出せるように早くよくなるうというのが、おきまりの冗談だったのです。そして私は彼女をのせて辻馬車をマニンホテルまでデナーに走らせることに成功した時は全く興奮したものでした。ミス・マクドナルドも又患者達のいい友達で、患者達のために献身的にやってくれました。「アギー」一人とデイトするのは容易なことではありませんでした。というのは彼女と「マク」はいつも一緒でしたから。しかし彼女等はこの病院をアメリカを離れているアメリカ人が望みうる最も快適な場所にしてくれました。<sup>7)</sup>

以上色々な角度からアグネスを見てきたが、彼女自身の率直で誠実な言葉も含めて、誰も彼女には惹かれずにはいられない存在としてアグネスは浮び上るのである。その中には勿論『武器よさらば』の中でフレデリックの‘code hero’の一人でもあるリナルディ大尉としてあらわれるセレーナ（Serena）大尉もいた。『武器よさらば』の中で、リナルディ大尉はフレデリックに「ミス・パークレーはおれよりもきみの方が好きだなあ。それは全く明白だよ。しかし、あの小柄なスコットランド娘も又大いによろしい」（“Miss Barkley prefers you to me. That is very clear. But the little Scotch one is very nice.”\_p. 21）とってフレデリックにこの勝負を譲っている。そして負け惜しみにミス・ファガソン（Miss Ferguson）という作品中のアグネスの親友に言及しているが、フレデリックが「あなたは彼女がお好きですか」（“You like her?”\_p. 21）と尋ねると「いいや」（“No.”\_p. 20）と断定的に否定しているところをみると、そんなに簡単にパークレーへの思いは断ち切れないことをヘミングウェイは見抜いている。アグネスはセレーナ大尉について次のように述べている。

セレーナ大尉は私をしつこく外食に誘いました。ヘミングウェイは言いまし

た。「さあ、大尉とディナーに行けよ、アグ」（彼は私をアグと呼んだこの世でたった一人の人間です。私は外の誰にもそうは呼ばせませんでした。しかし彼は仕方ありませんでした。）そこで私はミス・デロングのところへ行き、「今晚夕食に出かけてもいいですか」と言いました。彼女は、「ええ、勿論いいわよ」と言いました。どこへ、いつ、誰と、など尋ねませんでした。……私達はあるとても有名なレストランへ行きました。——それはあとでわかったのですが——ロレンゾ・アンド・ルシアでした。彼はとてもすてきなディナーを注文していました。彼は私にワインを飲ませようとしたが私はあまりワインを飲みません。ピアノと寝椅子がある部屋がありました。それは私の好奇心をそそりました。この部屋は女性を誘惑する場所のようだと思います。私は12時に勤務につかなくてはならないので帰ると言い続けました。そのようにして私はそこから出たのです。それはヘミングウェイが午後手術を受けた日のことです。彼は私に夕食へ行けと言っておきながら、手術の日の夜私がいなかったのに怒ったのです。<sup>8)</sup>

ヘミングウェイはセレーナ大尉の手前寛大さを装いながら、内心では極めて心安からず思っていたのである。ヘミングウェイは作品の中で、リナルディ大尉を絶えず梅毒の恐怖におびえさせている。しかし、アグネスを実際に誘惑する気持ちがあったかどうかは別として——しかしそれを全然否定はできない——セレーナ大尉はアグネスの言葉を借りれば、「魅力的で、ウィットに富んで、話相手にはもってこい」<sup>9)</sup>の人物だったようである。

ところで、アグネスをして、彼一人にのみ「アグ」と呼ばせたヘミングウェイのミラノ赤十字病院での評判はどうだったろう。そうしてアグネスと親しくなっていたプロセスはどのようなものだったのだろうか。カロス・ベーカー (Carlos Baker) は、次のように述べている。そこにはアグネスがヘミングウェイに惹かれた理由をも読みとることができる。

「そうですね、あの方は男性から愛されていました。私の言う意味はおわかりでしょう」とアグネスはずっと後になって述べた。彼女の言わんとするところ

ろは、彼の人柄の中には一種の英雄崇拜を誘発する要素があったということであった。ビル・スミスやカール・エドガーはワルーン湖やホートン湾での夏に彼の特別な資質を見抜いていた。即ち若々しさ、力への自信、動物的魅力、元気の横溢とすぐれたユーモア、話のうまさへの愛。更に数年を経て経験を積んだ今、彼は新たな不屈の精神、目的達成へのねばり強さ、スタミナ、独立心などを感じさせた。そして伝統にとらわれず、実践的原理に従って生きていく自由な人間であろうとする強固な決意がとりわけ目立った資質だったろう。……19歳になった今、彼よりも数歳年上の男達が彼を尊敬すべき同輩として受け入れるのだった。ビル・ホーンや、テッド・ブランバックや、またフィーバー・ジェンキンスのようなよき仲間達も、彼のみんなに負けまいとする習性や、彼の競争する心、彼の誰にも負けまいとする決意に気付かなかったし、又気付いていたとしても気になかなかつたろう。彼等は彼が発する光線を陽光のように浴びることに満足していたばかりか、それによって自分達を鍛えようと熱心に考えていた程であった。他人に及ぼす彼の力の偉大な一面は、彼がその力を持っていることを知っていたにもかかわらず、どういいうわけかそれによって自分を甘やかすことがなかったことだ。

生まれて始めて彼は又自分が女性に対して魅力があり、同時に女性に惹きつけられることも発見し始めていた。ウィラードは、看護婦達が、「彼を負傷した英雄のすばらしい見本として訪問者達に紹介するのを好んでいる」ことに気づいた。<sup>10)</sup>

このようなヘミングウェイに対する賛辞に対して、同じ病院でアグネスの先輩格であったシャーロット・M・ハイルマン(Charlotte M. Heilman)は、「ミス・バークレーは虚構の人物のようです」と述べた上で、「ヘミングウェイは若く(20歳ぐらい)衝動的で、大変粗野で、「うぬぼれが強く」非協力的でした。彼はひどく甘やかされていたという印象を与えました。彼はいつもたんまり金を持っていたようで、イタリアワインやそれを持ってきたポーターにチップを惜しげもなく与えました」<sup>11)</sup>というような負の見方をする者もいる。何人もの看護婦の中にはヘミングウェイに対して悪い印象を持つ者がいるのは当然だし、又、ヘミングウェイにそのような面

があったことも事実であろう。ただおとなしいばかりでは何も物事はなし得られないからだ。

この看護婦達と冗談を言い、訪問者達を楽しませる話題の持ち主も、昼間の暇な時にはアグネスにせせと手紙を書いた。始めは暇つぶしの戯れかと思っていたアグネスも次第にそれがセアリアスなものだと感じるようになる。夜勤を好んだアグネスが、ヘミングウェイも又 night owl と気がつくと、彼女は彼の部屋に立寄り、彼の話に耳を傾け、彼と話すのを楽しむようになるのである。ヴィラードはこのあたりの様子を次のように述べる。

私は彼女（アグネス）が彼（ヘミングウェイ）の脈をとるのでもないしぐさで、ある日彼が彼女の手を握っているのを見た時彼は優位に立ったなあ、ということを知った。一つには彼等の間に進行しているように思える特別な好意のために、そしてもう一つは考えられうるあらゆる機会に彼女が傍にいるように求めた彼の強引な……態度のために、彼が彼女の関心を特別に得ていることに気づかないわけにはいかなかった<sup>12)</sup>。

このような二人の関係をつくり出したのはいかにアグネスが年上とはいへ、ヘミングウェイの方だったろう。26歳のアグネスは前にも述べたように「そんなにロマンチックな性質」でもないし、又それまでに特筆すべき恋の経験もない。ヘミングウェイの方は、それ程完全なものではなかったかも知れないが、北ミシガンでのインディアンの混血娘プルデンス（Prudence）とのものがあった。その最初のキスは、『武器よさらば』でヘミングウェイが描いているものと同じようなものだったか、或はそうでなかったかわからない。

ぼくたちは夕暗の中で顔を見かわした。ぼくは彼女がとても美しいと思った。そして彼女の手を取った。彼女は私に手をとらせたままにした。私はそれを握りしめ、彼女の腕の下に私の腕をまわした。

「いけないわ」と彼女は言った。ぼくは腕を離さなかった。

「どうしていけないの？」

「いけないわ」

「いいじゃないか、ねえ」とぼくは言った。ぼくは彼女にキスしようと夕やみの中で体をかたむけた。そのとたん火花の散るような痛みの平手打ちがきた。

(We looked at each other in the dark. I thought she was very beautiful and I took her hand. She let me take it and I held it and put my arm around under her arm.

“No,” she said. I kept my arm where it was.

“Why, not?”

“No.”

“Yes,” I said. “Please.” I leaned forward in the dark to kiss her and there was a sharp stinging flash. *AFTA*, p. 26)

この平手打ちは実際にはなかったであろう。実際の二人の間のキスに至るまでの時間は作品のそれよりも長かったであろうし、ヘミングウェイは連日の手紙でアグネスの心の扉を開いていたと思われるからである。ヘミングウェイはキャサリンを「御しやすい女」にしたくなかったために、この平手打ちを作品の中にとり入れたに違いない。

その後ヘミングウェイはよく言われるように巨木が倒れるようにアグネスに夢中になっていくのだが、アグネスの方はどうもヘミングウェイと同じボルテージで熱情を高めたとは思われない節がある。というのは彼女は、ヘミングウェイが十分回復した9月もおしつまった頃、マジョーレ湖——後にフレデリックとキャサリンがボートでスイスへの脱出をする湖——で休暇を過ごしてミラノに帰ってみると、インフルエンザの流行で人手が必要になったフィレンツェの病院で働くことを志願していたのである。10月半ば、ヘミングウェイは夜汽車でフィレンツェに旅立つ彼女を見送った。それ以後ヘミングウェイが毎日のように彼女に手紙を書いたこ

とはいうまでもない。そしてアグネスからも度々返事がきた。

- 10月16日「私の心からの愛をこめて、いつも変らぬアグネスより」
- 10月17日「変らず愛しています——いつまでも——アグネスより」
- 10月22日「貞節なあなたの坊や夫人より」
- 10月24日「あなただけのものアギーより」
- 11月2日「あなたがいなくて寂しいの、心から愛しています」
- 11月3日「お休みなさい、愛しいあなたの坊や夫人より」<sup>13)</sup>

アグネスはサインに“your Mrs, Kid”という言葉を使っている。その表現が彼女が書いてよこしたとヘミングウェイが“A Very Short Story”の中で言っている“Theirs had been a boy and girl affair.”の伏線として既にここにあったとみることもできよう。しかし19歳のヘミングウェイにはそれまで見抜くことはできなかった。

アグネスは11月中旬にフィレンツェからエルシー・ジェサップ (Elsie Jessup) というアメリカ赤十字社の看護婦を連れて帰ってきた。そのため、ヘミングウェイはアグネスと二人きりになることはなかなかできなかったようである。その頃ヘミングウェイがフォサルタで負傷した時の指揮官であったジム・ギャンプル (Jim Gamble) 大尉が費用を全額支給するから1年間イタリアに留ってはどうかと勧めた。ギャンプル大尉はヘミングウェイがとても気に入っていたようでもあり、金廻りもよかったようである。ヘミングウェイはその気になっていたようだが、アグネスは強くそれに反対し、アメリカに帰るように説得した。

私の考えは彼をアメリカに帰らせることでした。というのは彼は年上の男達にとっても人気があったからです。彼等はみんな彼をとっても興味ある人間だと思っていました……私は彼に人のお金なんかになかったりしたら、ろくな人間にはならないわよ、と言いました。私は多かれ少なかれ少しは彼の面倒をみる責任があると思ったのでしょう。私の方が年上でしたから……彼は本当にろく

でなしになったでしょう。彼にはそういうところがありました<sup>14)</sup>。

このようにアグネスは後に述べている。ここに述べている気持は十中八九事実だったろう。しかし、残りのパーセントには、ヘミングウェイが、短気な性質で、嫉妬深く、怒りっぽい性質の持主であることも次第に気になっていた部分が含まれていたに違いない。

ミラノに帰ってから一週間にもならないうちに、アグネスはアメリカ部隊の間で猛威をふるっていた伝染病のためにトレヴィゾ (Treviso) へ行くことになった。この町はミラノから東へ、かなり遠く前線に近いところにあった。ヘミングウェイは一人彼女をここまで訪ねている。そこで彼はその気取った身なりのために、傷病兵達の嘲笑をかったらしいのだが、それに腹をたて、彼は無遠慮な口の利き方をしたりした。しかし、アグネスはここでヘミングウェイにアメリカへ帰国するという約束をとりつけた。自分もその中アメリカに帰り、二人は結婚するかも知れないとほめかけたかも知れない。それでヘミングウェイは彼女が当然自分の後を追って帰国し、彼と結婚してくれるものと信じてアメリカに帰る決心をした。彼はトレヴィゾで12月9日に会ってから、1月半ばにイタリアを離れるまで、1ヶ月もの間アグネスとは会っていない。ヘミングウェイがクリスマスから新年にかけて南イタリアを旅したこともあったが、1919年になって1月5日にミラノで開かれたウィルソン大統領夫妻の歓迎会にアグネスが出席したことを考えれば、彼女にその気があれば既にその前日の4日に赤十字病院を退院しているヘミングウェイに会った筈である。どうもこの空白の1ヶ月間はアグネスの方からヘミングウェイを避けたのではないかと思われるふしがある。

しかしヘミングウェイは勿論だが、アグネスもオーク・パーク (Oak Park) 宛に手紙を送りつづけてはいた。次の引用は1919年2月3日付のものである。ヘミングウェイは既に1月21日にアメリカの土を踏んでいた。



私には将来のことがわからなくなっています。どう対処していいかわかりません。アメリカへ帰るべきか、更に海外勤務に応募すべきかが現在の問題です。勿論これはただ近い未来に関することを言っているのは御存知のとおりです。次の時期についてはあなたが私の計画をお助け下さると思いますので。キャヴィーは最近私にとってもひどく当たるようになりました。私が浮気な女だと責めるのです。そして私をルース・ブルックスのようなふしだらな女の部類に入れるのです。私がそんな女ではないことは御存知でしょう？<sup>15)</sup>

しかしこの文面の中には、微妙にアグネスの心の動揺が読みとれる。キャヴィーが彼女を浮気な女だと責める理由は書かれていない。しかし、キャヴィーがアグネスを責めるにはそれなりの理由があったのである。アグネスには当時イタリアの貴族ドミニコ・カラッチオロ (Dominico Carracciolo) との間にロマンスが始まっていたのである。

それはアグネスがトレヴィゾよりも更に辺鄙な田舎のトルレ・ディ・モスト (Torre de Moste) の赤十字病院で始まった。カラッチオロは「アグネスには、その当時19歳のヘミングウェイよりはずっとやさしく、寛大で上品な心の持主であり、ずっと興味深く」<sup>16)</sup> 思われたのであった。又このイタリア将校にとってはアグネスは、「陽気で可愛気があり、好奇心とユーモアにあふれた元気のいいアメリカ娘で、彼の母親のサークルの中にいる元気に乏しい、箱入り娘達とは違って」<sup>17)</sup> みえたのである。わずか二ヶ月にもならない間に彼女はこの公爵相続人と婚約することに同意していた。彼女はカラッチオロの要請に従ってヘミングウェイからの手紙を全部焼いた。このようなアグネスの性急な行動をみると、カラッチオロが自分の身分を明かしたに相違ないことから、彼女が後に述べた、そして本論でも既に引用した彼女の「私には全く野心などありませんでした」という言葉は、やや怪しいものとなる。しかし玉の輿に乗りたがらない女はいないものだ、ということならばアグネスを責めるわけにもいかないだろう。

さきのヘミングウェイへの手紙より約1ヶ月後の3月1日にはアグネス

は更に一步おし進めて自分の気持を告白している。

ああ、私はどんどんいやな女になっています。毎日だめになっています。一つだけわかっています。それはあなたが思っているような完璧な女じゃないということです。今までもそうでしたが、今もそうであることがただはっきりしてただけです。今夜はひどくみじめな気持です。それではお休みなさい、坊や。性急なことはなさないで、お元気で。愛をこめて、アギーより。<sup>18)</sup>

この手紙にはその行間にヘミングウェイを裏切ったアグネスの後めたい気持がにじみでている。その後間もなくヘミングウェイはアグネスからの最後通告を受け取った。それには彼女が「イタリヤ軍の少佐を恋しており、自分達の恋は子供の恋愛ごっこのようなものだったし、自分は大変すまないと考えており、そして彼は恐らくわかってはくれないだろうが、やがては彼女を許し、彼女に感謝するようになるだろう。自分は全く予想もしなかったのだが春には結婚する予定だし、彼を心から信じており、これが一番いい方法なのだ」<sup>19)</sup>と書いてあった。ヘミングウェイが大変なショックを受けたことはいうまでもない。ヘミングウェイの姉 Marcelline は彼が数日本当に体調をくずして寝こんだ<sup>20)</sup>といい、Griffin は、ウインダミアに三週間引きこもった<sup>21)</sup>と書いていて喰違いをみているが、Marcelline の言うごとく、この痛惜の思い出がなければ、『武器よさらば』が生まれなかったことは確かである。

アグネスとカラッチオロとの恋も実らなかった。カラッチオロの母親の強い反対に合い、良家の息子によくあるように自分の意志を貫くことができなかつたらしい。ベーカーは、カラッチオロが家族に会わせるためにナポリにアグネスを連れて行ったと書いているが、アグネス自身はそれを否定している。彼女は同僚のキャビーとナポリを訪れた時たまたま母親と一緒に歩いていたカラッチオロを見かけたが、知らない振りをしたと言って

いる。

アグネスに jilt されたあとの虚脱状態のヘミングウェイをよくあらわしているのが、彼の短編「兵士の故郷」(“Soldier’s Home”)である。その中で主人公のクレブス (Krebs) の目は極めて冷めたものである。

漠然と彼は女の子は欲しかったが、女の子を手に入れるために骨折る気にはなれなかった。彼は女の子が欲しかっただろうが、そのために長い時間をかけることはいやだった。彼は策略や駆け引きにはまり込むのはいやだった。彼は求愛なんかする気になれなかった。彼はこれ以上嘘をつく気にはなれなかった。そんなことをする値うちもなかったのだ。(Vaguely he wanted a girl but he did not want to have to work to get her. He would have liked to have a girl but he did not want to have to spend a long time getting her. He did not want to get into the intrigue and the politics. He did not want to have to do any courting. He did not want to tell any more lies. It wasn’t worth it. — Hemingway, “Soldier’s Home,” Jonathan Cape, *The First 49 stories*, p. 124)

これは明らかにアグネスを意識したものである。彼は彼女とのことで疲れ、消沈し、嫌気をもよおしている。「策略や駆け引き」もアグネスへの風刺であり、「嘘」にしても裏切られた自分への自嘲でもあるのである。アグネスへの失恋の aftermath は、たとえ一時的にせよ、このような形で表れたといえる。

それではヘミングウェイとアグネスの性的関係はどの程度だったのだろうか。

ベーカーは「アグネスはキスの段階以上は許そうとはしなかった」<sup>22)</sup>と書いている。そしてアグネス自身もヘミングウェイとの性的関係を強く否定している<sup>23)</sup>。一方ヘミングウェイの方は、ミラノの将校クラブで始めて会い、親友となった当時23歳のエドワード・ドーマン・スミス

(Edward Dorman Smith) に、「足に副木ふくぼくをつけた男と love-making をするにはプロの看護婦でないと駄目なんだ」<sup>24)</sup>と豪語している。それで思い出すのは同じくドーマン・スミスに彼が語ったという南イタリア旅行談、「シシリー島はベッドルームの窓からの景色以外は何も見なかった。というのは彼が泊まった小さなホテルのママが彼の服をかくしてしまい、一週間彼を一人じめにした。もってきてくれた食べ物はずばりしかたし、彼女はすてきだった」<sup>25)</sup>である。「ほら吹き男爵」ヘミングウェイの面目躍如たるものがあるというべきか。結局アグネスがヘミングウェイをアメリカに帰らせ、自分もそれを追って帰国することもせず、ヘミングウェイが去ると殆んど同時にカラッチオロとの恋に陥ったところをみると、深い関係はなかったのではないかと考えたくなる。勿論それに疑問がないわけではない。次の引用は、二人のヘミングウェイ研究者の間のデイベイトである。

デニス・ブライアン：アーネストとアグネスが肉体関係を持ったとおっしゃる根拠は何ですか。

ピーター・グリフィン：アグネス・フォン・クロウスキーの手紙の中で、彼女はヘミングウェイと3日一緒に過したと書いています。そしてその文面は、「三日間一緒に過した時のことを思い出して下さい。あなたは落ち着けなくて一緒にやってくれる男の人を欲しがったわね。」というような趣旨のことを言っています。そして彼女は彼にある特別なところに顔を置いてそこで眠りにつくことについても書いています。

デニス・ブライアン：彼等は当時もっと純粋だったのです。彼女は二人が一緒に寝たことは否定しました。特別な場所に顔を置くことは彼の首であったかも知れません。<sup>26)</sup>

デニス・ブライアンは否定し、ピーター・グリフィンは肯定的である。しかし先にも述べたように二人のその後の行動と、アグネスの性格からすれば、どうしても否定的にならざるを得ない。「三日間一緒に過し、特別なところに顔を置いて眠った」<sup>26)</sup>としても、それは、今日でいう“petting”

の段階までであったとも考えられる。完全な行為まで進むにはヘミングウェイはまだ経験不足で（或は未経験といってもいい）あり、アグネスは節度をもった年上の女性であったからである。そして考えられうるヘミングウェイの完全な初体験は1919年の夏の終り、彼が手伝いをしていたホートン・ベエイ（Horton Bay）の店のウエイトレスの一人とであった、というのがどうも真実のように思われる。そして、それをフィクション化した“Up in Michigan”の中の描写は、それとなく性に不慣れさ、ぎこちなさを感じさせる二人の様子が読みとれるからである。

ヘミングウェイが『武器よさらば』の第14章で描いた、フレデリックとキャサリンとの病室での既に引用した甘い交換は、ヘミングウェイが10年の年月のあいだに得た経験をドラマ化したものであろう。

そしてこの章の終りにあたって、レイノルズがアグネスについて総括している箇所を引用しておきたい。

1918年の時点において、アグネス・フォン・クロウスキーは、自立した、しっかりした、冷静な女性であった。彼女は11歳で死んだ姉よりも長生きしていた。彼女はどんな言葉が話される異国でも自立することができた。彼女は男達に取巻かれていて、彼等との付き合いを楽しんだが、彼等との恋におぼれることは決してなかった。1918年当時としては旅慣れた女性だった。アラスカ、バンクーバー、ワシントンD.C., ニューヨーク市と移り住んでいた。彼女は、ベルグュー出身のプロの看護婦であり、又それに変な誇りを抱いていた。彼女は多くの赤十字看護婦より洗練されていたし、彼女等よりも言語能力に優れていた。彼女はヘミングウェイよりも年長であった。そして彼等の関係を断ったのは彼女の方だった。彼女は誰にも身を捧げはしなかったし、決して戦争が厭にはならなかった。アグネスがフィアンセの死のために「少しおかしくなる」と想像するのは難しい。——『武器よさらば』のキャサリンはそうになっているのだが——筆者。彼女は、機知に富み、賢明だが、やさしい男性を求めた。彼女はいつも新しい経験と更なる旅を求めた。<sup>27)</sup>

カラッチオロとの事が終わってから後、アグネスは再び海外勤務に応募し、ルーマニアで勤務している。その後ハイチの看護婦養成所長となり、そこで経済顧問局の監査官ハワード・プレストン・ガーナー (Howard Preston Garner) に会い、始めて結婚している。1928年のことでアグネスは37歳に近い年齢であった。しかしこの結婚は結局破綻し、1930年にはアグネスはアメリカに戻っている。

アグネスが『武器よさらば』の中にどのように影を落としているかを更にみなければならぬが、それは一先ず置いておくことにして、本論の主旨ではないが、ヘミングウェイがこの作品の中で言わんとしたもう一つのテーマである戦争に裏打ちされた世界観について少し述べてみたい。

#### IV

私は1975年に書いた論文「Frederic Henry の虚像」という論文の中で、『武器よさらば』の主人公フレデリックの“Anti-hero”性を論じたが、<sup>28)</sup>そして一言でいえば、キャサリンこそ、真の愛を宗教にまで高めた“hero”であり、その姿に同じ人間の一人として深く感銘を覚えると書いた。当時はその考えにあまり賛同者はなかったように思うが、その考えは今でも殆んど変わっていない。フレデリックの行動は自己中心的である。さきに述べた拙論の中でも書いているように、タリアメント川で決行した脱走や、スイスへの逃亡もキャサリンのためではなく自分自身のためである。キャサリンは戦争の最中に子供を生んで一人で育てるとなればどんな苦難を伴うか知っていたであろうが、フレデリックのためにはそれを厭わない。フレデリックは自衛本能に長けてはいるが、犠牲的精神を発揮し、奉仕する心を持っていない。牧師との会話の中にそれらに対する関心は窺うことはできるがそれは儀礼上のものか、困った時の神頼みに近い。それに反してキャサリンは特別な宗教こそ信じてはいないが、その行動は宗教そのものである。

ところでこのフレデリックの自己中心的な行動、即ち単独講和、即ち軍

からの脱走——ここではキャサリンとの関係はしばらく置いて——はどういう風に説明すべきであろうか。ヘミングウェイが自分の実際の経験とは切り離して、キャボレットの大退却をこの作品の重要な中心に置いたことはすでに述べた。そして、その退却とフレデリックのスイスへの脱出逃亡は関連があるのではないか、ヘミングウェイは意識的にそれを行ったのではないか、そして、もしそうだとすればそれは何故なのか。ヘミングウェイは、この作品で事更に厭戦気分を強調しようとしている。彼自身はアグネスとのロマンスもあり、アメリカに帰ってからも熱狂的に英雄として迎えられたのだからたとえ負傷したとしてもそれは殆ど後遺症とはならなかったし、彼の『武器よさらば』の中の有名な文句、「栄光とか、名誉とか、勇氣とか、神聖とかいった抽象的な言葉は、具体的な村の名前や、道路の番号や、川の名前、連隊番号、それから日付などにくらべればいやらしいものだ (Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of villages, the numbers of roads, the names of rivers, the numbers of regiments and the dates. — *AFTA*, p. 185) が、彼の19才の経験から生まれたものではないことは確かである。ではこの『武器よさらば』全体を覆うペシミズムとシニシズムはどうして生まれたのであろうか。ここに少し長いが、その鍵を鮮明に解き明かす重要な文を引用してみたい。

1920年代は世界大戦によって事実上損害をこうむらなかったアメリカという国が、ひとりよがりの孤立主義政策へと逆戻りした頑迷な時代であった。何よりも悪いことは、それはアメリカ的気質の大きな部分を占めるものとして、われわれが絶えず引用してきた理想主義の恐るべき崩壊によって、ひときわ目立った時代であり、また若者たちのあいだに流れていた愛国主義が、冷笑的な幻想へと変わり、家族のまとまりが、教会、自動車、安っぽい大衆娯楽などの誘惑による影響で、分散され、弱体化された時代であった。……

1920年の合衆国は、複雑なことや危険なことに、とくに理想ということには、あきあきしていた国家であった。6年間にわたる世界の危機が、合衆国の

はじめての外国干渉という食欲を十分に満たしてくれたのであった。国際的爆薬をもてあそんでいた6年という歳月が危険を実証してくれたので、二つの大洋と独立という伝統の防壁のかげに、無事に退いていたいという欲望が生じたからだ。結局8年間にわたるウイルソンの新自由主義が、国際的協力や国際連盟のような不評判な目標を学校教師然をますます強調し、道徳の優位性を絶えずにおおせていたので、普通の市民にとっては、理想主義というミルクはすっぱくなってしまい、ついに市民は家族を扶養し、アメリカの慣習や制度を支え、楽しく生活する責任以外には、どんな責任の重荷からも永久に自由になることしか望まなくなったのである。

.....

... ああその.....ハンサムで、女房の尻に敷かれ、涙もろく、まぎれもない民主主義的なウォーレン・ハーディング（共和党大統領）は、アメリカ大衆の、否応なしに大人に成熟していく結果を回避し、かつての色鮮やかな希望にみちた単純な過去へ逃避したいという欲望を皮肉にも示す一つの象徴であり、現実逃避の願望の具現化であり、重みのない、外見は魅力的であっても内容の空虚な彫像であった。.....その主要な道標は孤立主義であり、「弱小」国に対するきびしい態度であり、高い保護関税であり、事業に対する政府の——干渉ではなく——援助であった。<sup>29)</sup>

これ程明確に第一次大戦後のアメリカを捉えたものはないだろう。戦後のアメリカには理想主義に対する例の伝統的なモンロー主義と個人主義の反動の波が押し寄せ、アメリカ自身がフレデリック同様世界と単独講和をしたのであった。ヘミングウェイはその波をこの『武器よさらば』に結集した。この作品がベスト・セラーとなってアメリカ国民に大歓迎されたのはそのためでもあった。

ヘミングウェイ自身も戦後のフランスでの生活や、希土戦役の取材などで次第にシニシズムに染まっていったことも事実であり、自分自身の戦闘体験と、古年兵たちに対する観察から次第にアメリカ人一般が抱いた第一次大戦への評価と一致した感情が回顧されたことであろう。そしてアメリカの孤立主義は第二次大戦まで続いたといえる。中立国スイスへ逃避行す



るフレデリックは、第1次大戦後のアメリカの国全体の体験を象徴するものだということができるという意味で、この作品を眺める必要があるのである。

## V

さて、ミス・バークレーに帰ることにしよう。既に述べたようにキャサリンの容姿はたしかにアグネスのものであるが、かなり詳細にたどってきた如くアグネスの性格は、キャサリンとはだいぶ違っているようだ。アグネスは自立心が強く、容易に男に溺れるタイプではない。彼女はヘミングウェイの Sex を満足させはしなかったし、彼に対して絶対的ではなかったし、彼の思い通りになる女ではなかった。それはいってみれば彼の母グレイスにいくらか似ていた。ヘミングウェイが母グレイスと対立関係にあったことを思い起こすと興味深い。

それに対して最初の妻ハドレー (Hadley) は全く違っていった。彼女はヘミングウェイに絶対的といってい程従順であり、彼にできる限りの自由を与え、彼をできる限り喜ばせようとした。ピアノで彼の心を安らげ、家を整え、一緒に外出してワインを飲み、共に喜んで旅に出かけた。(しかし、彼女の寛大さが彼を失う一因でもあるのだが)。

『武器よさらば』の中で、キャサリンは、アグネスの姿をもって登場するが、その性格は次第にハドレーに移っていくように思われる。キャサリン・バークレーはフレデリック・ヘンリーの中に次のように没入してしまう。

「..... 私はあなたの言うて欲しいように言うし、あなたので欲しいことをするわ。そうしたら外の女の子なんかいらなんでしょう？」彼女は私をととても幸せそうな顔をして見た。「あなたので欲しいことをして、言うて欲しいように言ったら、その時には私は大成功の女でしょう？」

「そうだよ」

「あなたすっかり用意ができるみたいだけど、私に何して欲しい？」

「もう一度ベッドへ来てくれ」

「わかったわ、行くわよ」

「おお、かわいい、かわいい、かわいい奴」と私は言った。

「ねえ、私はあなたの望んでいらっしゃることは何でもするでしょ」

「君はとてもすてきだ」

「まだそれ程上手ではないんだけど」

「君はすてきだよ」

「私はあなたが望んでいらっしゃるものがしたいの。もう私というものはないんだわ。ただ、あなたの望んでいらっしゃることでだけ」

「このすばらしい奴」

「私はいい女でしょ。そうじゃなくて？」

「あなたは外の女の子は欲しくないわね。そうでしょ？」

「欲しくなんかない」

「ねえ、わかるでしょ。私はいい女でしょ。あなたの望み通りにするんですもの」

(I'll say just what you wish and I'll do what you wish and then you will never want any other girls, will you?" She looked at me very happily. "I'll do what you want and say what you want and then I'll be a great success, won't I?")

"Yes."

"What would you like me to do now that you're all ready?"

"Come to the bed again."

"All right. I'll come."

"Oh, darling, darling, darling," I said.

"You, see," she, said. "I do anything you want."

"You're so lovely."

"I'm afraid I'm not very good at it yet."

"You're lovely."

"I want what you want. There isn't any me any more. Just what you want."

“You sweet.”

“I’m good. Aren’t I good? You don’t wany any other girls, do you?”

“No.”

“You see? I’m good. I do what you want.” *AFTA*, pp. 105-106)

この中のキャサリンは、フレデリックの中に溶け入って自分自身を消していくように見えるが、ただ、一つ注意すべきは、フレデリックが他の女に心移すのではないかと非常に心配している事を見落すことはできない。この作品の中で彼が他に心移すような女性の姿はないし、そのような状況でもない。勿論これまではフレデリックは他の女を愛したことは認めているし、キャサリンもそれはそれとして過去のことは一応納得している。だけれどもこれからのことに不安を感じているのだ。

1946年四番目の妻メアリー（Mary）と結婚した時に書き始められ、1958年まで断続的に書かれたとされる『エデンの園』（*The Garden of Eden*）は、ヘミングウェイが、一番目の妻ハドレーと二番目の妻ポーリン（Pouline）を両手の花としていた頃を「エデンの園」と名付けてなつかしみながら、当時の思い出に浸りながら書いたと思われるが、その中では、やさしかったハドレーが、心身共にヘミングウェイを愛した様子が、手にとるように描かれている。そして、その時の心と言葉が、この『武器よさらば』のキャサリンの言葉ではないか、と私には思われる。そしてヘミングウェイが『エデンの園』のハドレーに「キャサリン」という名を与えていることもそのキャラクターに対するヘミングウェイの思い入れの深さがわかるというものであろう。『エデン』の中のキャサリンは積極的に自分がむしろ男の役割を演じてディビッド（David）のヘミングウェイに迫る。

彼は目を閉じていた。彼は彼の上に彼女の長い軽い重みを感じることができた。彼女の乳房は彼に押しつけられ、彼女の唇は彼の唇の上にあった。彼は横

たわり、何かを感じ、それから彼女の手が彼をつかみ、もっと下の方を探り、彼が自分の手で助けてやり、それから暗やみの中であお向けになったまま何も考えず、ただ重みを感じ、中に変なものを感じた時、彼女は言った、「今はもう、誰が誰だかわからないでしょう？」

「わからない」

「あなたは変わろうとしているのよ、あなたは。そうよ。あなたは変わるのよ。あなたは私のキャサリンなの。あなた変わって私のキャサリンになって私にあなたの役をさせてくれる？」

.....  
終に彼等は二人共死んだようになり、うつろになったが、終りではなかった。彼等は暗やみの中に足をからませて横たわり、彼女の頭は彼の腕の中にあった。月が上っていた。それで部屋の中がやや明るかった。彼女は手を彼の腹の方へまさぐりながら下げていき、「私が仕様のない野郎だとは思わないでしょ？」と言った。

.....  
その若い男は女のまわりに手を廻し、彼女をしっかりと彼に引き寄せ、彼の胸に彼女の美しい乳房を感じた。彼女のいとしい唇にキスをした。彼女を固く抱きしめ、心の中でさよなら、さよなら、さよならと言った。

「このままじっと抱き合って何も考えずにいよう」と彼は言ったが、彼の心はキャサリンさよなら、さよならいとしい女よ、さよなら。幸せに、さよなら、と言っていた。

(He had shut his eyes and he could feel the long light weight of her on him and her breasts pressing against him and her lips on his. He lay there and felt something and then her hand holding him and, searching lower and he helped with his hands and then lay back in the dark and did not think at all and only felt the weight and the strangeness inside and she said, "Now you can't tell who is who, can you?"

"No."

"You are changing," she said, "Oh you are. You are. Yes you are and you're my girl Catherine. Will you change and be my girl and let me take you?"

.....

At the end they were both dead and empty but it was not over. They lay side by side in the dark with their legs touching and her head was on his arm. The moon had risen and there was a little more light in the room. She ran her hand exploringly down over his belly without looking and said, "You don't think I'm wicked?"

.....

The young man put his arms around the girl and held her very tight to him and felt her lovely breasts against his chest and kissed her on her dear mouth. He held her close and hard and inside himself he said goodbye and then goodbye and goodbye.

"Let's lie very still and quiet and hold each other and not think at all," he said and his heart said goodbye Catherine goodbye my lovely girl goodbye and good luck and goodbye. (Hemingway, *The Garden of Eden*, Macmillan Publishing Company, New York, pp. 17-18)

この場面はヘミングウェイの“androgyny”というよりも、ハドレーの情愛ととるべきではないだろうか。そしてそれにもかかわらず、ディビッドは、キャサリンを裏切り、「さよなら、さよなら」と心の中で言っている。『武器よさらば』のキャサリンは、そのことを感じとってフレデリックに捨身の愛で迫っているのである。この愛と宗教にまで高めたキャサリンの愛はハドレーのヘミングウェイに対する愛として、『武器よさらば』の中で「宗教」にまで高められて永遠に光を放つことになった。そして、ハドレーと共に過ごしたスイスのモントルー (Montreux) やローザンヌ (Lausanne) の楽しい思い出はフレデリックとキャサリンのものとなって『武器よさらば』の中に書き込まれた。ヘミングウェイがローザンヌ会議を取材中にも、ハドレーはヘミングウェイの母グレイスに絵葉書やクリスマスの贈物などを買って送ったりして、<sup>30)</sup> 行届いた心配りをみせていることもあわせて思い起され、ハドレーの心がしのばれる。

ヘミングウェイは、Kennedy Library の Hemingway Room にある原稿によると、『武器よさらば』の結末の部分を書き直したことになるが、そのいずれも、赤ん坊の死はともかく、キャサリンは生き長らえずに死で終わっている。あのようによさしく、献身的で、奉仕の精神そのものであるキャサリンがどうして死ななければならないのか、それは全く不条理という外はない。ヘミングウェイは『武器よさらば』から3年後に出版した『午後の死』(*Death in the Afternoon*)の中で、「もし二人の男女が愛し合うならば、ハッピー・エンドで終ることはありえない」(If two people love each other there can be no happy end to it.)と述べているが、これは明らかにフレデリックとキャサリンをそしてヘミングウェイとアグネスを、そしてひょっとするとハドレーを意識したものであるといってもいいだろう。そしてその奥にあるのは、やはりヘミングウェイの悲劇的ヴィジョンである「世界はすべてを殺す」(The world breaks everyone.)であり、ロースト・ゼネレーションであろう。『武器よさらば』のキャサリンをフレデリックの“code hero”とする Saudva Spanier の説<sup>30)</sup>も容易に信じ難い。何故なら『武器よさらば』以後、キャサリンへのアクセスをみせた“Hemmigway Hero”は見出し難いからである。

ヘミングウェイは、「今までのところ、道徳に関して言えば、あとで気分がいいのが道徳的なものであり、あとで気分がよくないのが不道徳なものなのだ」(So far, about morals, I know only that what is moral is what you feel good after and what is unmoral is what you feel bad after.)と同じく『午後の死』で述べているのが、キャサリンの死によって「あとで気分がよかった」とは断定できないとしても、フレデリックが病院を出て行く後姿に *Men Without Women* の世界の片鱗をみるのは私だけであろうか。ヘミングウェイはナーダの世界の中を「やがては殺される世界」を知りつつも“machismo”を誇示しなければならなかったのである。

アグネスは1955年、キー・ウエスト (Key west) の図書館勤務という仕事に戻っていた。その頃ヘミングウェイは既にキー・ウエストを離れており、その住居は記念館になっていた。アグネスが、キー・ウエストに住むようになったというのも何か因縁めいているのだが、その時このヘミングウェイ記念館の案内人がアグネスが『武器よさらば』のキャサリンのモデルだと説明していたようだ。それでアグネスは『武器よさらば』を読みなおしたようである。アグネスは次のように言っている。

最初それを読んだ時は二度目に読んだ時ほどいらだちませんでした。もう一度読んだ方がよいと思ったのは15年位前 (1955年) でした。その時は、キー・ウエストのヘミングウェイ記念館で聞いた話のために怒りをおぼえました。私はそれを受け入れるのは少し難しいと思いました。<sup>31)</sup>

アグネスは自分が実際にあのようにヘミングウェイに身も心も奉仕したととられるのは我慢できなかったであろう。しかし、ヘミングウェイは、『陽はまた昇る』の中で、ダフ・トワイステン (Duff Twysden) にしたように、フィクションの中でアグネスを徹底的に自分のものとし、最後にはこの世から葬ることによって、彼を裏切ったアグネスに報復したととるのは“too harsh”であろうか。アグネスが怒ったのも彼女がそのように考えたからに外ならない。しかし先程からも述べてきたように、ただそれだけではあるまい。彼は彼の世界観と、当時のアメリカ大衆のムードと、個人的経験や感情を巧みな技法によって織りまぜて、『武器よさらば』を生み出したのである。

(注) I

- 1) One of the critics who comes closest to being right about Catherine is Naomi Grant, who claims that Catherine is more mature than Frederick and that she helps mature Frederick into a code of love.<sup>20)</sup> Catherine, like other Hemingway women, is a good teacher

in the art of giving of self. With observations and questions like "I'll do what you want and say what you want . . ." (p. 109) and "Can I do anything to please you?" (p. 121) Catherine sounds a bit too "Total Woman" for many, certainly for many feminists, as well as for those whose fetish for "individualism" forces them to overlook the devastating feelings of competitiveness and alienation which the ethics of individualism has inspired in recent human history. (Roger Whitlow: *Cassandra's Daughters*, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1984, p. 23)

II

- 2) *A Farewell to Arms*, Charles Scribner's Sons, New York, 1969, p. 18.本文中では *AFTA* と略す。

III

- 3) . . . got tired of the library . . . this isn't active enough. (Michael Reynolds, *Hemingway's First War*, p. 186)
- 4) <AMERICAN RED CROSS NURSING SERVICE PHYSICAL EXAMINATION>

Name: *Agnes Von Kurowsky* Date: *January 13, 1918*

Age: *26*

Height: *5' 8"*

Weight: *133*

General Physic: *Well developed, well nourished*

Chest measurement: *35"*

<BELLEVUE HOSPITAL>

Recommendation for: *Agnes Hannah Von Kurowsky*

Date: *Jan. 22, 1918*

Did training include obstetrics: *Yes*

The care of children? *Yes*

What position or responsibility did applicant hold during her training?

*Pupil's Head Nurse*

What can you say of her personality? *Pleasing*

Is she neat? *Yes*



Refined? *Yes*

Initiative? *Average*

Executive Ability? *Possesses a fair amount* (ibid, pp. 189-190)

- 5) Many of the pictures are filled with uniformed soldiers, crowding about her, joking, smiling. Wherever she moved she collected a following. In group pictures of the Red Cross nurses her face stands out.
- 6) Q: During the twenties, moving back and forth between New York City and Europe and Haiti, you were young and very attractive.

A: And unattached.

Q: And unattached. You must have had more than one marriage proposal during that time. Were you not marrying — were you staying unattached because you wanted to?

A: I didn't meet anyone I cared enough about. When I went overseas the first time, I was supposed to be engaged to a doctor, but I forgot him as soon as the boat sailed — I'm not used to this. I'm not made romantically. And when I came back another girl had got him. She came to me and said, "Don't think you're going to get him back." I said that I hadn't the faintest idea. I hadn't the slightest desire to see him again.

Q: If you were going to characterize yourself in the Twenties, how would you see yourself? What were you like?

A: I was always looking for something. I was always looking for adventure. I was never ambitious, not the slightest.

(ibid., pp. 192-193)

- 7) I remember her as a tall girl, doubly attractive so far from home, cheerful, quick, sympathetic, with an almost mischievous sense of humor — an ideal personality for a nurse. It used to be a standing joke among the patients to get well quickly so we could take 'Aggie' out, and I was properly thrilled when I achieved this goal by inviting her for a cab drive and dinner at the hotel Manin. Miss MacDnald also was a good friend of the patients and devoted to their welfare. It was not easy to arrange a date alone with 'Aggie,' for she and 'Mac' used to stick together, but they made the hospital as cheerful a spot as any

- American expatriate could wish. (ibid., p. 200)
- 8) Serena kept at me and kept at me. Hemingway said, "Oh, go out to dinner with the Captain, Ag." (He was the only person in the world that ever called me Ag. I never allowed anyone else to do that, but you couldn't stop him.) So I went down to Miss DeLong and said, "Can I go out to supper tonight?" She said, "Oh yes, sure." She never asked where, when, who, . . . We went to a very famous restaurant—I found out afterward—Lorenzo and Lucia. He had ordered a very nice dinner. He tried to get me to drink wine but I don't drink much wine. And there was a piano and couch in the private room. That intrigued me. I thought this is some sort of place for seduction. I kept saying that I had to go home because I was on duty at twelve o'clock. So I got out of there. That was the day that Hemingway was operated on in the afternoon. He was the one that kept telling me to go and then he was mad when I was out during the evening that he was post-operative. (ibid., p. 198)
- 9) . . . a fascinating person, . . . very witty and good companion. (ibid., p. 197)
- 10) "You know how he was," Agnes, long afterwards. "Men loved him. You know what I mean." What she meant was that there were elements in his personality that elicited a kind of hero worship. Bill Smith and Carl Edgar had discovered his special qualities in the summers at Walloon Lake and Horton Bay: the youth, the pride in strength, the animal charm, the boyish ebullience and good humor, the love of yarn-spinning. Now that he was older, with more experience, he communicated a new sense of fortitude, tenacity of purpose, stamina, and independence: perhaps above all the willed determination to be a free soul, untrapped by tradition, living his life in accordance, with pragmatic principles. . . . Now that he was nineteen, men several years older than he were ready to accept him as a coeval to be looked up to. Good companions like Bill Horne, Ted Brumback, or Fever Jenkins neither noticed, nor would have minded if they had, his habit of measuring himself against them, his competitive spirit, his determination to excel them all. They were not only content but even eager to

tan themselves like sunbathers in the rays he generated. One great part of his power over others was that knew he had it, yet somehow managed not to be spoiled by it.

For the first time in his life he was also discovering that he was attractive to and attracted by women. Villard noticed how the nurses “liked to exhibit him to visitors as their prize specimen of a wounded hero.” (Carlos Baker, *A Life Story, Charles Scribner's Sons*, 1969, p. 49)

- 11) Hemingway was young (about 20), impulsive, very rude, “smarty,” and uncooperative. He gave the impression of having been badly spoiled. He always seemed to have plenty of money which he spent freely for Italian wine and tips to the porter who brought it. (*Hemingway's First War*, p. 195)
- 12) I knew he had the inside track when I saw him holding her hand one day in a manner that did not suggest she was taking his pulse. I couldn't help noticing that he received an extra share of her attention, due partly to the special fondness that seemed to be developing between them, partly to his compelling . . . attitude which required her attendance at every conceivable turn. (Quoted in Kert, *Hemingway Women*, p. 57)
- 13) October 16: “all my love and double, as ever *your Agnes*”  
October 17: “I love you still — ever — Agnes”  
October 22: “Your faithful Mrs. Kid”  
October 24: “Yours only — Aggie”  
November 2: “I miss you dear, and love you so much.”  
November 3: “Good night sweetheart, your Mrs. kid” (*Hemingway's First War*, p. 201)
- 14) My idea was to get him home to the United States because he was very fascinating to older men. They all found him very interesting . . . I told him he'd never be anything but a bum if he sponged off someone else. . . . I think I felt more or less an obligation to look after him a little bit because I was older. . . . he really would have gotten to be a bum; he had the earmarks. (*Hemingway Women*, pp. 63-64)
- 15) Agnes to Hemingway, February 3, 1919.

- “The future is a puzzle to me and I’m sure I don’t know how to solve it. Whether to go home, or apply for more foreign service is the question just now. Of course you understand this is all merely for the near future, as you will help me plan the next period I guess. Cavie has been very cruel to me lately, accusing me of being a flirt, which is putting me in Ruth Brooks’s class. You know I don’t do anything like that, don’t you? (*Hemingway’s First War*, p. 206)
- 16) “(he was) very gentle, a gentle nice soul, much more interesting to me than a nineteen-year-old Hemingway at that time.” Quoted in *Hemingway Women*, p. 67)
- 17) . . . gay and charming, a high-spirited American women full of curiosity and humor, so different from the languid, sheltered daughters of the people in his mother’s circle. (*ibid.*, p. 67)
- 18) Agnes to Hemingway, March, 1,1919  
 “Oh, I’m going to the dogs rapidly, and getting more spoiled every day. I know one thing. I’m not the perfect being you think I am. But as I am, I always was, only it’s just beginning to creep out. I’m feeling very *cattiva* tonight. So goodnight, Kid, and don’t do anything rash but have a good time. Aftt. Aggie” (*Hemingway’s First War*, p. 207)
- 19) . . . she had fallen in love with an Italian major, that theirs had been only a boy-and-girl affair, and that she was sorry and knew he would probably not understand but might someday forgive her and be grateful to her. She said that she expected absolutely unexpectedly, to be married in the spring. She said she believed in him absolutely and knew it was for the best.  
 (Peter Griffin: *Along With Youth*, Oxford Yniversity Press, p. 113)
- 20) Marcelline Hemingway: *At the Hemingways*, An Atlantic Monthly Press, 1961, p. 188)
- 21) *Along With Youth*, p. 114.
- 22) Agnes refused to permit the affair to progress beyond the kissing stage. (*A life Story*, p. 50)
- 23) *Hemingway’s First War*, p. 219.
- 24) “. . . it takes a trained nurse to make love to a man with his leg in

- a splint.” (Mayers: *Hemingway*, p. 36)
- 25) . . . he had “seen nothing of Sicily except from a bedroom window because his hostess in the first small hotel he stopped in had hidden his clothes and kept him to herself for a week. The food she brought him was excellent and she was affectionate; Hem had no complaints except that he saw very little of the country.”  
(Quoted in Baker, *A Life Story*, p. 56)
- 26) Perter Griffin: In Agnes von Kurowsky’s letters she writes about spending three days with Hemingway and the line is, “Remember how we spent three days together and you became restless and wanted some men friends along to do things with?” Words to that effect. And she writes to him about putting her face in a special place and going to sleep there. (Denis Brian, *The Faces of Hemingway*, p. 31, *Grafton Books*, London, 1988)
- 27) Agnes Von Kurowsky was a self-sustained, tough, unsentimental woman in 1918. She had survived the death of an older sister at the age of eleven. She was able to sustain herself in another country in whatever language they chose to speak. She was surrounded by men—men whose company she enjoyed but with whom she was never madly in love. For 1918 she was a well-traveled woman: Alaska, Vancouver, Washington D.C., New York City. She was a professional nurse from Bellevue and took great pride in her credentials. She was more sophisticated than most Red Cross nurses and a better linguist. She was older than Hemingway, and it was she who broke off their relationship. She was never devoted to anyone, nor was she ever war weary. It is difficult imagining Agnes ever being “a little crazy” because of the death of a fiance. She valued witty, clever, but gentle men; she was always looking for new experience and further travel.  
(*Hemingway’s First War*, pp. 218-219)

IV

- 28) 拙論「Frederic Henry の虚像」下関商経論集第18巻第3号1975.
- 29) ロッドW. ホートン・ハーバートW. エドワーズ：関口功・白石佑光共訳『アメリカ文学思想の背景』小川出版, 1972. pp. 335-339.

V

30) Sandra Whipple Spanier: "Catherine Barkley and Hemingway Hero; Ritual and Survival" Quoted in ed, Harold Bloom; *Modern Critical Interpretations; A Farewell to Arms*, Chelsea House Publishers, New York, 1987.

31) A: I wasn't so irritated the first time I read it as I was the second time. It was about fifteen years ago [1955] that I thought I'd better look at it again. That time it irritated me because of the remark I heard in the Hemingway museum in Key West. I found that a little bit hard to take.

(*Hemingway's First War*, p. 182)